

『古川ロッパ昭和日記』における副詞「全然」の用法

一言語変化の過渡期における個人の使用実態一

梅林 博人

1. はじめに

副詞「全然」は、戦前においては「全然＋否定」が主流でありながらも、いっぽうで、

(1) 僕には全然新しい世界を、一広い世界を覗かせました。(芥川龍之介『河童』昭2。下線は引用者、以下同様)

(2) 事情は未開時代と全然変わつて来る。(寺田寅彦「天災と国防」昭9) いうように「全然＋肯定」もまた許容されていた。

しかし、戦後になって、

(3)「(引用者略) あたし、全然、もてあますのよ」(獅子文六「觸手」『自由学校』昭25)

(4) 案内人(文春の誰かさん)はニヤリと笑つて言いました。「(引用者略) 頭かるのは実用的で、全然もうかッとするから」／アプレゲールは全然エライよ。(坂口安吾「田園ハレム」『安吾巷談』昭25)¹⁾

などの流行語「全然＋肯定」が現れると、次の(5)～(8)のように、肯定形式との呼応を問題視する気運がにわかに高まり、結果、「全然＋肯定」の使用率は戦前よりも低下するに至った。

(5)たとえば「到底」や「全然」などを、「到底よい」「全然ある」などと使うことはできませんから、一定の呼応を必要と

する副詞の種類をたてることはできると考えられます。(『新制中学国文法口語編教授参考書』昭25 星野書店87頁)

(6) 下に必ず打消を伴なう(三省堂『辞海』昭27)

(7) 近頃気になるのはよく、「全然よく出来るの。」式の言葉を使ふ事である。「全然」とは否定の意味であつて、「全然出来ない。」とか、「全然駄目だ。」と云ふのならわかるが、これでは意味をなさない。(小堀安奴「思ひ出」『言語生活』18、昭28.3。小堀氏(1909-1998)は当時44歳)

(8)「てんで好きだ」「てんでいい」のような「てんで」の用法、「全然好きだ」「全然いい」のような「全然」の用法、なかなか意表に出た表現が少なくないが、大体において、流行語は、名前の通り一時の流行に過ぎず、生命力ははかないようである。(岩淵悦太郎「言語時評―流行語」『言語生活』27、昭28.12。岩淵氏(1905-1978)は当時48歳)

研究の進んだ今日では、以上のような語誌は研究者の間では周知のこととなっているが、しかし、そのいっぽうで、こうした語誌にまつわる素朴な疑問―すなわち、戦前から「全然＋肯定」を使い続けてきた少なからぬ大人たちは、このような急速な言語変化や世論の変化に際して困惑はなかったのだろうかという疑問―

については、語誌の普及とは裏腹に、未だ十分な報告がなされていない。

(5)～(8)の流行語批判を見ると、当時の大人たちは毅然とした態度を示していたかのような印象を受けるのであるが、実際にはどのような状況であったのか必ずしも定かではない。

そこで、筆者は、個人の経年的使用実態を見ることのできる資料として、『古川ロッパ昭和日記』(昭9～35年、全四巻、2007年、晶文社。以下『日記』と記す場合がある)を選定し、そこに出てくる「全然」の使用実態を調査して上記の疑問について考察をした。

本稿では、その調査結果を示し、それに基づいて、言語の規範に鋭敏であったロッパにおいては、戦後、「全然」の使用に関して困惑や妥協があった可能性が高いということを述べる。そして、「下に必ず打消を伴う」という、国語史上の使用実態に反する規範が「全然」において成立する過程においては、大人がこれまで使用していた「全然+肯定」を適宜処分(使用語彙からの抹消)をした可能性があるという私見を示すことにする。

2. 古川ロッパについて

調査結果を示すに先立って、古川ロッパ、および、『古川ロッパ昭和日記』について述べるが、本章では、まず、ロッパの略歴、言語の規範に対する意識、『自由学校』との関わり、アプレゲールに対する嫌悪について確認し、その人物像および戦後流行語との関わりについて確認しておくことにしたい。

2-1. 略歴

ロッパの略歴は以下の通りである。

- (9) 喜劇俳優。本名郁郎。東京都出身。映画雑誌の記者から俳優に転じ、ロッパ一座を結成してエノケン(榎本健一)と並ぶ人気者となった。脚本、随筆など著作も多い。明治三六～昭和三六年(一九〇三～六一)(小学館『日本国語大辞典 第二版』より引用)

ここで注目すべきことは、ロッパの生年が冒頭であげた小堀氏(1909-1998)や岩淵氏(1905-1978)のそれと近く、三人はほぼ同世代であるという点である。したがって、ロッパもまた二人と同様に戦後のさまざまな流行語にふれていたと考えられる。

2-2. 言語の規範に対する意識

雑誌記者の経験もあり、著作も多い俳優ロッパが、言語の規範に鋭敏であったことは想像に難くないが、その様子は『日記』の各所にも見ることができる(昭16.12.9、昭17.7.18、昭18.4.11、同8.2、昭20.3.4、同4.24、同5.1、昭22.8.23、昭27.12.2、昭28.12.26、昭31.12.4など。以下においても『日記』の引用に際しては年月日を記す)。今、その一部を引用する(下線は引用者)。

- (10) 戦況ニュースをきいてみて、アナウンサーが一人も正しい標準語発音が出来ないのに、腹が立ってしょうがない。戦後に、国語の確立整理を叫ばなくてはならない。(昭16.12.9)
- (11) 東中野からの電車中、加茂正一「新語の考察」を読む。(昭20.5.1)
- (12) 文部大臣室へ通る。(引用者略)、僕は喋る日本語、標準発音のことに触れ、

日本語講座をラヂオでやることをすゝめた。(昭22.8.23)

- (13) さて然し、講釈つてものゝ何と幼稚なものか。たゞ覚えてそれを力まかせに喋ってゐるといふだけのものである。文法も何も、めっちゃくちゃ。「許し呉れまするやう」「柱へくゝしつける」などの乱文、ヒトシは全然逆の発音。「ぬき足さし足」は、「ヌキヤアシ、サシャアシ」と発音、これぢゃあ全く野蕃国の芸である。(昭27.12.2)

- (14) そのうち前に座ってる池田弥三郎と議論になる。旧仮名づかひ党の僕、彼は「七千万の中、旧仮名を墨守する者は一割だ」と言ひ、新仮名たるべしの説。(引用者中略) 新仮名は発音通りが理想だといふのに対し、そんなら新仮名で、「帝国」に何と仮名を振るか、発音はテエコクなのに、テイコクと振るだらうときめつければ、彼も負けてゐず「テーコク」と書くと言ふ。文字は発音と違ふのが本当なりといふ我説に対し、彼は、文字は発音通りにすべしと言ふ。そんなら君は、英語のNIGHTをニグフトと発音するか!等々の論争を、(昭28.12.26)

下線を付した語句や各文章の内容から、ロッパの言語事象に対する関心の高さ、言語の規範に対する鋭敏さをうかがうことができる。

2-3.『自由学校』との関わり

ロッパは、先掲(3)のような流行語「全然＋肯定」の載る『自由学校』とも関わりがあり、そこに載る流行語についても知っていた。そのことは、次の引用から明らかである。

- (15) その後、穂積純太郎より電話、「新宿地球座で獅子文六の自由学校を劇化、許可された。作者の意見で、主人公五百助はロッパをと推せんされた、駒子役の轟夕起子は既に定った、何んなものでせう?」とのこと、(昭25.12.26)
- (16) 映倫が、もっと「珍説」らしくせよと云ふ由。そのため大石をして「パチンコ」だの「トンデモハッパン」などゝ言へと言ふから、それは一切言へない、あのシーンを簡略にするよりなしと主張する。(昭27.12.2)

したがって、ロッパは、同小説に載る流行語「全然＋肯定」についても見聞していたと考えられる。そして、2-1、2-2の状況を考慮すると、ロッパもその流行語には一家言を有していたであろうと推察するのが自然である。

2-4. アプレゲールへの嫌悪

流行語「全然＋肯定」の使用者の一部にアプレゲール(戦後の無軌道な若者)がいた公算は高いのであるが²⁾、ロッパは、そうしたアプレゲールに対して嫌悪感を示している(昭24.10.26、昭25.2.8、同3.13、同8.24、同11.1、同12.28、昭26.1.30、同2.7、同3.8、同6.6、同10.30、昭27.3.24、同4.9など)。この点も、日記の一部を引用して確認しておきたい。

- (17) 此のウスよごれた世の中、アプレゲールの阿呆どもは、俺を受け入れないのだ。無理はない、俺は上等すぎる。(昭25.11.1)
- (18) 近ごろのアプレ相手に通じるのは、GIの日本語とチャイニーズ(その実例)、昔はよかったと、代々木の歌右衛門邸の声色ばなし。(昭26.1.30)

(19) 俺の頭をこする。エチケットのない
アプレ記者め。(昭26.6.6)

(20) アプレ青年、思ったことを、場所柄
もわきまへず声に出して言ふ癖あり。
(昭27.4.9)

「アプレゲール(無軌道な若者)」という
言葉が存在すること自体から明らかな
ように、アプレゲールへの不満は当時の
世情とも言えるものでロッパ個人に限っ
たことではないのであるが、しかし、こ
うした嫌悪の感情もロッパの言語使用に
影響を与えたのではないかと目されるこ
とから、それを示す日記については注目
をしておきたい。

3. 『古川ロッパ昭和日記』について —研究資料としての適性—

次に、『古川ロッパ昭和日記』(著者：
古川ロッパ、監修者：滝大作、全四巻、
2007年新装復刊、晶文社)について、ま
ず、各巻の日記の時期と分量を確認する。

- ・戦前篇：昭和9-15年 日記頁量794頁
- ・戦中篇：昭和16-20年 日記頁量887頁
- ・戦後篇：昭和20-27年 日記頁量918頁
- ・晩年篇：昭和28-35年 日記頁量908頁

いずれの巻もA5判二段組みの体裁で、
「戦前篇」では昭和10年の日記が欠損と
なっている。

こうした配分とロッパ自身が記した日
記の全分量との関係については、監修者
の滝大作氏が次のように述べている。

全体の量は、お二人の試算によると、
四百字原稿用紙で優に三万枚を越え
るという。／これを丸ごと出版する
と、A5判、二段組み五百ページの本
がおよそ二十冊になる。常識的に考
えて、相当読書好きの方でも容易に

読み切れる分量ではない。／相談の
結果、清氏の了解を得て、凡例に示
した原則によって、(引用者中略)三
分冊にまとめることになった(「戦
前篇」解説806頁。「お二人」は晶文
社の津野海太郎氏、村上鏡子氏)

また、「戦後篇」の「解説」(929～932頁)
には、出版作業開始後に当初の編集計
画が変更され、最終的に上記の全四巻と
なったいきさつが記されている。

こうした体裁をふまえたうえで、この
『日記』の研究資料としての適性を考え
てみるならば、まず、同『日記』が言語量
の面から見て十分なものであることは明
らかである。そして、これに小学館『日本
国語大辞典 第二版』の用例採取資料であ
るという実績を加味すると、同『日記』は、
今回の調査においても適切な資料と考える
ことができる。

4. 調査方法および調査結果の提示

今回の調査では、素読による用例収集
と、「全然」を検索語とする機械検索を併
用した³⁾。そして、採集された「全然」の
用例112例について、新野(2011)の第
2部第3章に載る表1～4の分類項目を
踏襲して用法分類を行い、その結果を次
ページ以降に掲げる【図表1】、【図表2】、
【図表3】の形にまとめた。

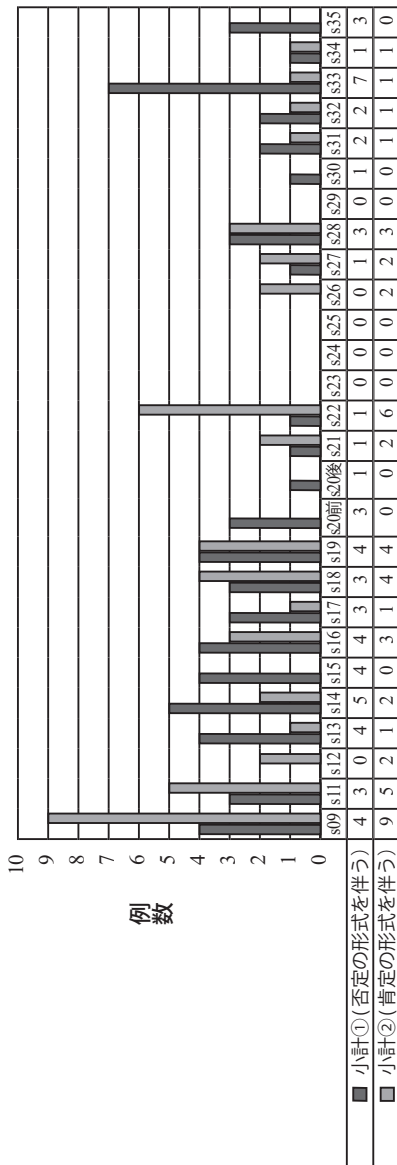
なお、本稿では、新野氏の分類が先行
研究中でもっとも詳細と考えられること
から、氏の分類を踏襲した。また、今回は
機械検索も利用したわけであるが、用法
の解釈とその判定、ロッパ個人およびそ
の周辺事情の理解、時勢や世情の理解、
等々のために、『日記』については広範に
目を通したことを付言しておく。

【図表 1】『古川ロッパ昭和日記』の「全然」の使用実態

分類	年代										s20前後										計							
①否定の 形式を 伴う	形容詞「ナイ」 助動詞「ナイ」「ズ」 小計①	s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35
		1	0	0	1	4	0	0	2	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	2	0	18例(16.07%)
		3	3	0	3	1	4	1	2	2	2	0	1	1	0	0	0	0	1	2	0	1	1	1	5	1	3	42例(37.50%)
		4	3	0	4	5	4	3	4	3	1	1	1	0	0	0	0	1	3	0	1	2	2	7	1	3	60例(53.57%)	
②肯定の 形式を 伴う	A否定の意の接頭辞を含む語 B二つ以上の物事の差異を表す語 C否定的な意味の語 Dマイナスの価値評価を表す語 E否定的意味やマイナス評価でない語 小計②	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4例(3.57%)
		0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5例(4.46%)
		0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4例(3.57%)
		8	3	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	1	2	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	1	0	23例(20.54%)
		0	1	2	0	1	0	1	0	4	1	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	14例(12.50%)
		9	5	2	1	2	0	3	1	4	4	0	0	2	6	0	0	2	3	0	0	1	1	1	1	1	0	50例(44.64%)
③その他	呼応部分の省略 連体(「全然の～」) 小計③	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例(0.89%)
		0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例(0.89%)
		0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2例(1.79%)
	計(小計①+②+③)	13	8	2	5	7	4	8	4	7	9	3	1	3	7	0	0	2	3	6	0	3	3	2	3	112例(100.00%)		

*数字は例数。右端欄百分率は少数第3位で四捨五入。最上段年代欄の「s」は昭和の略記。「s10」は日記欠損。「s20前」は20年の戦前、「s20後」は20年の戦後。
 *分類項目は、新野(2011)第3章の各表を踏襲し並行的に見られるようにした。ただし項目名については若干表現の変更をした。

【図表 2】 否定の形式を伴う「全然」と肯定の形式を伴う「全然」の年代別使用状況 (図表 1 小計①欄と小計②欄のグラフ化)



【図表3】「全然＋肯定」における肯定形式の子細

◆ 「A 否定の意の接頭辞を含む語」を伴う用例の場合 (4例)
「無言、」(昭9)、「不許可になる」(昭17)、「無切符で」(昭22)、「無礼、」(昭33)
◆ 「B 二つ以上の物事の差異を表す語」を伴う用例の場合 (5例)
「反対で」(昭16)、「違ふ」(昭19)、「別に」(昭22)、「違った」(昭26)、「逆の」(昭27)
◆ 「C 否定的な意味の語」を伴う用例の場合 (4例)
「(カンドコを)外される」(昭11)、「(スピードを)落とし」(昭19)、 「沈黙しちまったり」(昭21)、「やめよ！」(昭28)
◆ 「D マイナスの価値評価を表す語」を伴う用例の場合 (23例)
「三枚目の顔をして」「淋しい」「くさった」「早く終わっちゃう」「三枚目」 「ガラガラどんである」「ムザンだった」「くさり、」(以上昭9)、 「素人くさくて」「悪い」「悪く」(以上昭11)、 「(やってみると)笑の王国劇、」(昭13)、「腐ってた」(昭14)、「たよりなし」(昭16)、 「ダメになり」(昭19)、「音痴で」(昭21)、「失敗、」「醜悪、」(以上昭22)、 「駄目、」(昭26)、「新派めき、(笑ひの少ないのが欠点。)」(昭27)、 「めちゃめちゃ。」(昭28)、「(あゝ 今月は、全然)遊びか。」(昭32)、 「ダメなんだろうね？」(昭34) (「ガラガラ」「めちゃめちゃ」は原文踊字)
◆ 「E 否定的意味やマイナス評価でない語」を伴う用例の場合 (14例)
「(義太夫など全然)受ける」(昭11)、 「東北弁でやることに定めた。」 「(どうにも芝居になるところはない、全然)創作の手である。」(以上昭12)、 「方向を変へる」(昭14)、「優れてみて」(昭16)、 「(コメディーではなく、全然)トラジディーだが。」 「国策番組になりそうな景色である」「森氏の勢力である」 「テクシーにしようと決心する」(以上昭18)、 「サイレントで撮ってゐる、」(昭19)、 「気楽にやり」「新解釈の新しき「金色夜叉」」(以上昭22)、 「自費の由」(昭28)、「同じ楽屋」(昭31)

5. 調査結果の分析 (1)―従來說に 合致する様相―

5-1. 否定の形式を伴う「全然」の使用状 況―大勢に従う様相―

まず、図表1によって、否定の形式を
伴う用例(「全然…ない」等)の数を見る
と、それは全112例中60例となっている

(53.57%。図表1の小計①欄右端)。

この様相は、新野(2011)による、
“全然”は、大正末期～昭和初期から
否定を伴う例が多くなり、表1から、
昭和に入ってから新聞記事では全
用例の5割近くになっていたことが
わかる。文学作品についてはすでに
若田部(1991)、尾谷(2006)で同様

の指摘がある。(211頁)
という指摘に合致するものといえる。そして、2-2で見た規範意識の高さをも考慮すると、ロッパは、種々の用法を知りながらも、やはり「全然+否定」が主流であるという『日記』当時の大勢を意識して「全然」を用いていたと考えられる。

5-2. 肯定の形式を伴う「全然」の使用状況 —バラエティに富む肯定形式—

次に、肯定の形式を伴う用例(A～Eの用例)の数を見ると、それは全112例中50例となっているが(44.64%。図表1の小計②欄右端)、今、図表3によって、それぞれの肯定形式をさらに具体的に確認してみると、その表現はかなりバラエティに富んでいることが分かる。

50例のうち、二度出てくる語句は、B類の「違う」(昭19、26)、D類の「三枚目」(昭9、9)、「くさる」(昭9、9)、「悪い」(昭11、11)、「ダメ」(昭19、34)のみで、それ以外は一例である。

筆者は、戦前～戦後の新書を調査資料とした梅林(1995)で、こうした肯定形式のバラエティに富む状況に関して、

「全然違う」「全然別だ」「全然異なる」「全然反対だ」「全然だめだ」「全然冷淡だ」「全然不可能だ」などと集めてみると、ある程度の勢力になるように見えるのであるが、ひとつひとつの具体的な表現に戻してみると、それは、「全然……ない」に比して、きわめて劣勢なものとなる。(48頁)と述べたことがあるが、今回の調査でも、戦前～戦後の新書の「全然」と同様の使用状況が確認されることとなった。

そして、前節5-1と本節5-2の内容を

併せ見ると、『日記』の「全然」は、一面では、当時の大勢に従ったオーソドックスな使用実態を示していると考えられ、その使用に際して奇抜な意図が存在していたわけではないと考えられる。それは、先の2章で見たロッパの人となりからすれば当然のこととも目される。

しかしながら、今回、一個人の使用実態を調査したことによって、先行研究では指摘されることのなかった新たな様相が見られたことも、また事実である。そこで、次に章を変えて、その点についてふれてみることにしたい。

6. 調査結果の分析(2) —混乱・困惑を反映する様相—

今回の調査結果でもっとも目立つのは昭和23～35年の使用実態である。図表1の一部をグラフ化した図表2では変化の様相が顕著で、一見して昭和9～22年とは異なった事情の存在することが察せられる。そこで以下では、この特徴ある様相に一往の解釈を与え、その解釈に基づいてさらに考察を展開してみたい。

6-1. 昭和23～35年の様相に対する解釈 まず、事実の確認から始める。

図表1、図表2を見ると、昭和23～35年においては、「全然」の使用のない時期と使用のある時期とが交互に訪れていることが分かる。

- (a) 昭和23～25年：「全然」の使用なし
- (b) 昭和26～28年：「全然」の使用あり
- (c) 昭和29年：「全然」の使用なし
- (d) 昭和30～35年：「全然」の使用あり

このうち「全然」の使用のない時期の『日記』頁量は、(a)が「戦後篇pp.289-

665」で約377頁分、(c)が「晩年篇 pp.131-252」で約122頁分である。特に(a)の頁量は、『戦後篇』の四割強(377頁÷918頁)となっており、決して少なくない紙幅に「全然」がまったく存在していないということになる。

また、「全然」の使用のある(b)と(d)の時期について、その使用傾向を比べてみると、(b)の時期は、肯定の形式を伴う用法もほどほどに用いられているということから昭和9～22年の使用傾向と類似する観があるが、(d)の時期は、肯定の形式を伴う用法の使用が衰微しており、過去の使用傾向とは一線を画しているように見える。つまり、(b)と(d)の時期では、同一人物であるにもかかわらず、「全然」の使用の仕方が変わっている可能性があるということになる。

このように、複雑な事情が潜んでいそうなこの時期の様相を、はたしてどのように解釈すべきであろうか。今回、筆者は、この点について次のように推察した。

(a) 混乱困惑期(昭23～25年)

戦後に出現した流行語「全然+肯定」の様相が、自らの使用表現である「全然+肯定」と類似していることに気づき、混乱・困惑する。そのため、正誤問わずすべての「全然」の使用を一時的に見合わせる。

(b) 試行期(昭26～28年)

従来の用法に基づいて「全然」の使用を試行するも、冒頭の小堀氏のような流行語批判を見聞することで、再び困惑する。

(c) 検討期(昭29年)

世論および流行語の周辺事情(主に使用者の一部にアブレゲールがいる

ということ)を見て、自らのすべての「全然」の使用について検討する。

(d) 方針変更期(昭30～35年)

自らの使用表現であった「全然+肯定」のうちのいくつかを処分、すなわち己の使用語彙から抹消し、世論に応じた「全然」の用法を始める。

もちろん、ロッパがすべてこの通りにしたということではない。あくまで可能性の一つとしてこうした推察をしたわけで、主旨は、この時期においてはロッパのような言語に鋭敏な大人であっても、「全然」の使用については、こうしたいわば遅疑逡巡があったのではないか、先掲(5)～(8)のもとでも旧「全然+肯定」についての記憶は健在であったのではないかということなのである。

ただ、このように考えた場合、(c)(d)でなぜ使用方針の変更に踏み切ったのか、その理由を考えてみる必要があろう。ロッパのような大人が自らの表現を処分する方向へとなぜ進んだのであろうか。

これについては、やはり、自らの表現が軽薄な流行語と見紛われることを嫌ったからではないかと推察せざるを得ない。自らの表現が、軽薄な流行語と同等に見なされることは、規範意識の高かったロッパには耐えがたかったのではないかと推察されるのである。

6-2.「下に必ず打消を伴なう」という規範との関わり

そして、(a)～(d)のような個人の意図的な行為を昭和20～30年代に想定してみると、「下に必ず打消を伴なう」という過度な規範意識の発生も、いくぶんなめ

らかに説明できるのではなからうか。

鈴木(1993)は「『全然』……ない」という言い方は、国語教育とは関係なしに、日常の用法から自然に浸透し、規範意識として確立したのだらうか。」と述べるが、「下に必ず打消を伴なう」という国語史上の使用実態に反する過度な規範が、仮に自然に浸透していくのだとすると、その場合、戦前まで多くの大人たちによって使用された旧来の「全然+肯定」の存在は、どうにも障害になるであろう。したがって、その障害の除去作業のあったことを考えることになるが、そのような時、前記(a)～(d)のような意図的な行為があったのだとしたら、除去はスムーズに考えられそうである。

不自然な規範の成立過程には、個人の意図的な作用が存在したという観点が有効なのではないかと考えるのである。

なお、付言すると、以上の言及から、冒頭の素朴な疑問には、「当時の大人もやはり『全然』の使用に際しては困惑をしていた」という答を示すことになる。今日、研究者は「下に必ず打消を伴なう」(三省堂『辞海』昭27)というかつての指摘に頭を悩ませているが、じつは、当時の大人達もその指摘には困惑していたのではないかと疑うのである。

7. おわりに

今回、先行研究では手薄であった個人の経年的用法調査に基づいて、戦前・戦中・戦後の「全然+肯定」にまつわる素朴な疑問を考察した。

個人の使用実態を見ることに有効性を感じたいっぽうで、やはり、それは一個人の様相であるということを十分に承知

しておかねばならないとも思われた。

解釈のあり方などをさらに検討し、今後につなげたく思う。

注

- 1) 用例の出典：『河童』(『芥川龍之介全集』第十四巻 平成8年 岩波書店)、「天災と国防」(『天災と国防』昭和13年、岩波新書)、『自由学校』(『昭和文学全集4獅子文六集』昭和27年、角川出版)、『安吾巷談』(『底本坂口安吾全集第九巻』昭和45年、冬樹社)
- 2) この点については梅林(2000)、梅林(2012)で言及したことがある。
- 3) 調査方法については、橋本行洋氏(花園大学)から多大なご教示をいただいた。記してお礼申し上げる。

参考文献

- 足立広子(1990)「副詞「全然」の用法について」『南山国文論集』14、南山大学国語国文学会
- 梅林博人(1994)「副詞「全然」の呼応について」『国文学解釈と鑑賞』59-7、至文堂
- 梅林博人(1995)「『全然』の用法に関する規範意識について」『人文学報』266、東京都立大学人文学部
- 梅林博人(1997)「肯定表現を伴う『全然』の異同について」『人文学報』282、東京都立大学人文学部
- 梅林博人(2000)「流行語批判とその背景—「全然」の場合について—」『相模国文』27、相模女子大学国文研究会
- 梅林博人(2012)「『全然』再考—迷信、アプレ、前提の否定など—」『相模国文』39、相模女子大学国文研究会

岡崎晃一 (2008)「『全然』考」『親和国文』
43、神戸親和女子大学国語国文学会
尾谷昌則 (2006)「構文の確立と語用論的
強化：「全然～ない」の例を中心に」『日
本語用論学会大会研究発表論文集』2、
日本語用論学会
尾谷昌則 (2008)「アマルガム構文として
の『「全然」＋肯定』に関する語用論的
分析」児玉一宏・小山哲春編『言葉と
認知のメカニズム—山梨正明教授還暦
記念論文集』ひつじ書房
小池清治 (1994)『日本語はどんな言語
か』ちくま新書
小林賢次 (2004)「全然いい」北原保雄編
『問題な日本語』大修館書店
鈴木英夫 (1993)「新漢語の受け入れにつ
いて—「全然」を例として—」松村明先
生喜寿記念会編『国語研究』明治書院
田中一彦 (2005)「『全然おいしいよ』は問
題な日本語か？」『言語情報学研究』1、
大阪市立大学文学研究科言語情報学会
新野直哉 (1997)「『「全然」＋肯定』につ
いて」佐藤喜代治編『国語論究6 近代
語の研究』明治書院
新野直哉 (2010)「新聞記事における副
詞“全然”の被修飾語について—明治
末～昭和戦前期と現在—」『表現研究』
92、表現学会
新野直哉 (2011)『現代日本語における進
行中の変化の研究—「誤用」「気づかな
い変化」を中心に』第2部「『「全然」＋
肯定』をめぐる研究』ひつじ書房
飛田良文 (2012)「辞書の正確さとは何か
「全然」の語義について」『ユリイカ』3
月号、青土社
松井栄一 (1977)「近代口語文における程
度副詞の消長—程度の甚だしさを表

わす場合—」『松村明教授還暦記念 国
語学と国語史』明治書院

若田部明 (1991)「『全然』の語誌的研究—
明治から現代まで—」『解釈』37-11、教
育出版センター

付記

本稿は、第49回表現学会全国大会（平
成24年6月3日）の研究発表の内容を元
に書きあらためたものである。発表時お
よびその後多くの方から貴重なお意見
をいただき、また、編集委員会からもご
教示をいただいた。記してお礼申し上げ
る。なお、本稿は、国立国語研究所の共同
研究プロジェクト「近現代日本語におけ
る新語・新用法の研究」の成果の一部で
もある。

（相模女子大学）